ネカマな僕とかっこよすぎる彼氏な彼女

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネカマな僕とかっこよすぎる彼氏な彼女

【Ｎコード】
Ｎ５２０２Ｚ

【作者名】
アリス法式

【あらすじ】
並行型思考ネットワーク＜ダイヤグラム＞が普及した時代、僕らはそこにいた＜ダイヤグラム＞の性能を遺憾開く発揮したＶＲＭＭＯＲＰＧ＜ログセリオン＞の世界に。
とか何とか小難しい話はおいておいて、ネカマな僕とカッコイイ彼女、そんな二人のほのぼのオンラインライフです、適当だなおい。
そんな、お話を書いていくつもりのような気がする。

更新は不定期！　以上。

いちわー　僕の彼氏はカッコイイ（前書き）

書いてしまいました。

やってしまいました。

腹切って死ねばいいですか、はいわかります。

いちわー　僕の彼氏はカッコイイ

―ログイン―

まどろみを越えて、ゆっくりと景色が変わる。

ログ・セントラル社によって作られた平行思考型ネットワーク＞ダイアグラム＜

既存のサーバーに依存せず。

人の思考、脳その物がひとつの端末として機能する、そんな理論の元作り上げられた＞ダイアグラム＜は急速に人類に普及して言った。

まだ、サーバーとの完全な隔絶は成功していないが、人間の自律神経を読み取るプロセスを組み込んだ小型の端末を使うことによって、画面ではなく思考、そして一人一人の視覚にネットワークを映し出す、刻み込むことが可能になった世界。

そんな、卵形のカプセルにこもらなくても気軽に視覚をネットワークに依存させることができた世界で、ネットゲームが発展を遂げない理由は無かった。

その神経まで、ネットに依存させることによって実現した、完全なるＶＰＭＭＯ。

そこに、人類がはまり込んでしまったのは当然の話しだったのかもしれない。

五感すべてを働かせ、風を感じ、食を感じ、あこがれた世界で時を過ごす。

そして、僕もそこの住人の一人である。

僕こと、神崎（かんざき）　命（みこと）１６歳のセントラル学園の高等部の一年生だ。

セントラル高校、その名のとおり、ログ・セントラル社が社会貢献の一環として作り上げたマンモス校で学業カリキュラムの一環として。

午後からの授業はログ・セントラル社が作り上げたβ版ＶＲＭＭＯＲＰＧ「ログセリオン」の世界で過ごすことなどといった特殊な面もあるが、基本はほかの学校と変わらないところである。

まあ、β版云々としては被験者の数を確保するのが楽だからといったのがもっぱらの噂だが。

僕達としても、学校で、授業ではなくしかもゲームがやり放題と言うのだから願ったりかなったたりである。

いまでは、β版の試験も済み、今日から本営業に入るのだが、本営業にはいるに当たって、β版に無かった機能が何個か加えられているというので、いま僕はそれを実験中である。

確認したところ、一つ目は、β版には無かった、生態情報の取り込みができるらしい。

生態情報つまり、身長や顔の造詣などを現実の自分ベースで作ることができるとのこと。

二つ目は、何個か新しい職業の追加、β版は剣士や魔法使いなど大雑把な職業しか無かったので、マニアックな路線を付き進みたいプレイヤー達には受けているようだ。

ちなみに、もちろんだがβ版からのキャラの移行は可能である。

β版ゆえにキャラの育成上限は５０レベルと低めに設定されているが、それでもたくさんのバグと戦いながら本営業までこじつけたのは学生達の功績も少なくないといってもいいはずだ、これ位の報酬は無いと悲しいよね。

と、昨日学園の講堂で行われた、本営業万歳報告でめがねをかけた地味な生徒会長が言っていました。

とりあえず、思考ディスプレイの中に自分のキャラの３Ｄモデルを映し出す。

身長は１５６センチほど、青い髪に大き目のめがねをかけた地味娘な魔法使い、これが僕が作り上げたキャラだ。

実をいうとこれは、自分の顔に似せて作っているので、スキャンしなくてもあまり変わらない。

ここ笑うところじゃないよ。

っと、でも身長はちょっと伸びるかな。

流石に１６０はありますよ、ふん。

スキャンを開始して、出来上がった３Ｄモデルを違和感が無いように元のキャラモデルにかぶせて行く。

おし。ちょっと身長が伸びたぜ！

出来上がったのは、身長が１６０センチほどになった蒼髪の魔法使いの少女、

あれ、顔もちゃんとかぶせたはずなんだけどな？

どう見ても、蒼髪のめがねをかけた少女がそこにいる、はいはい、女顔ですよ！

プライバシー保護のためのめがねをかけてっと。

はい完成、蒼髪地味な魔法使いです、実はネカマな僕のせいで、β版から女の子設定です。

まあ、そういう人間ばっかりが集まっている学園でもあるので、特に珍しくも無いんだけどね。

β版では「ネカマによる、ネカマのための、ギルド」なんてふざけた奴らもいたくらいだし。

さてと、キャラはできたし行きますか。

僕の相方でもある、誰よりもカッコイイ男の娘なだんな様に会いに。

―ログイン　コンテニュー―

いちわー　僕の彼氏はカッコイイ（後書き）

グハ

ち、血だ

ばた！

にわー　私の可愛いネカマな彼女（前書き）

やっちまった物はしょうが無いよね。

まあ、兄勇妹魔の邪魔にならない程度に書いて行きます。

にわー　私の可愛いネカマな彼女

ふう、

と一息つくと、私こと宮崎風花（みやざきふうか）はこった肩のコリをほぐすように腕を回す。

現在いる場所は、生徒会室、その大きなイスにゆっくりと力を抜きながら腰をかけていく、いまは、野暮ったいめがねは外しており、親友などからは、風花はめがねを外せばかっこいいのにといわれる風貌を惜しみなくさらしている。

しかし、仮にも女の子だカッコいいというほめ言葉はどうかと思うんだ、と、考えながら、その腰まである長い髪をポニーテールに結い上げていく。

さて、今日からは本営業か、忙しくなるな。

ほかの生徒会役員はもう、それぞれの委員会を従えて、「ログセリオン」内の警備や、初心者に対するマナーの講習、まあ、チュートリアルともいうが、などにはいっているだろう。

私も、管理者権限として与えられている、ＧＭキャラをもっているくらいだしな。

まあ、忙しいの二三日だとたかをくくってはいるのだが、さっき退出していった風紀委員長が提出していった「本営業においての人口の推移」と書かれた報告書には予想の倍を上回るほどの一般プレイヤーが登録している事例を出している。

「ふう、これはしばらくフウカに会いに行けないかな」

名前が、一緒だということで仲良くなった、蒼髪の魔法少女の姿を思い浮かべながら、さっさと仕事を終わらせるために私はめがねをかけた。

「さっさと終わらせて遊びに行こう」

彼女のことだきっとまってくれているだろう、いや、本営業は生態情報を取り込めるそうだから彼になるのかな？

まあ、ネカマな彼女のことだきっとそのままだろう。

などなど、笑みを浮かべながら、私は仕事を片付けていった。

はあ、なぜ重要な書類はまだ紙媒体なのだ？

と、ため息を吐きながら。

大体の仕事が片付いたのは、８時を回るころだった。

さて、私も行くとするか。

結った髪をといて、また、めがねを外す、１７３センチという女子にしてはなかなか大きい身長をゆっくりとイスに横たわらせてリラ

ックスする。

―ログイン―

視界が、軽くホワイトアウトしてから、目の前に『ログセリオン』の文字が浮かび上がる。

そして、キャラ設定の画面を開くとキャラが二つ浮かび上がった、GM用のキャラと、私に似せた男キャラなぜかかっこいいと言われてしまうので、意地になって思わず男キャラを作ってしまったのだが、それはいまはおいておこう。

キャラ名　みこと

みことの3Dモデルを確認しながら、ほかの生徒と同じように、自分の生態情報をスキャンしてみこととかぶせていく、うん、ほとんど変わらなかった。

それによって黒に戻ってしまった髪の色を白に変更して、もう一度、みことの3Dモデルを上からしたまで眺めていく。

少し釣り目な瞳と、中性的な顔立ち、身長は同じく173センチだ。

レベルは50、髪は白、鎧も合わせて白で統一している。

はあ、自分ながら、ゲームキャラにするとなぜカッコイイのだ、と悩みながらも。

さて、彼女に会いに行こうかと気持ちを切り替える。

なぜか、めちゃくちゃ可愛いネカマな魔法少女の元までいこうか。

―ログセリオン　コンテニュー―

にわー　私の可愛いネカマな彼女（後書き）

はい、投下終了。

気が向いたら、書きますよ。

さんわー　ネカマな僕と幼女になった店長さん（前書き）

さんわーです。

頭がこっちに向いてるうちに書いてしまいました。

さんわー　ネカマな僕と幼女になった店長さん

―ログイン―

一瞬のホワイトアウトの後、目を上げると、そこには懐かしい光景が広がっていた。

始まりの町「アレクセイ」、フィールドにでるためのゲートを中央にすえて、放射線状に街道が伸びその道に沿って町並みがある。

そして、そのゲートがある中央広場はいま現在、数多くの初心者プレイヤーによって埋め尽くされていた。

中には、初心者プレイヤーに安く物を売っている学生プレイヤーの姿や、チュートリアルを行っている風紀委員のＧＭプレイヤーの姿もちらほら見ることができる。

懐かしいな、β版が始まった時の光景を幻視して、僕はついそう思った。

とりあえず、愛しのみことさんはいるかなっと思い立って、ステータスバーの中からフレンドの名簿を呼び出す、たくさんの学生プレヤーの名前が書かれた名簿をスクロールさせて目当てのみことを見つけるが、名前はオフラインの証である黒い文字で表示されていた。

ふむ、忙しいのかな？

聞いたことは無いが、β版で一緒に遊んでいるときも良く、バグが

出たなどで落ちるときがあったので、きっとみことさんは管理者側の生徒なのだなー、と前々から思っていた。

流石に本営業で忙しいだろうし、しばらくは一緒に遊ぶのは無理かな？

じゃあ、とりあえず、バイト先にでも顔を出すかな。

目当てのみことさんに会えそうに無いので、僕はバイト先に行くことにした。

実をいえば＞ログセリオン＜の世界において学生の役目はβ版の被験者だけでなく、お店などの店員キャラも任されていたりする。

世界観、情景に力を注いだ＞ログセリオン＜の世界の自由度はかなり大きい、そして、β版をプレイしていた学生達には、特典であり義務であるお店の経営があったのだ。

つまり、その辺の店舗などは学生達が運営している物が多いのだ。

僕も、学生であるかぎり、その役目から逃れられるはずも無く、超美人な魔女が店長の魔宝具店「ウイッチコンチェルト」にバイトとして雇われている。

まあ、お店は、「アレクセイ」にあるから歩いていってもすぐ付くのだが。

カランカランと鐘を鳴らしながら、見慣れた魔宝具店の扉を開くと。

「おおー、まっておったぞふうか」

と、いつもどおりのしゃべり方をする幼女が立っていた。

「あれー、店長は？」

「ここに、いるじゃろうが」

ふむ、声は聞こえるのだが？

「むむ？この声はどこから？」

「わしじゃーーーーー！」

幼女でした。めっちゃ幼女でした。

「店長、幼等部だったんですか？」

「小等部じゃー！」

怖くない、怖くない、前までの美人さんに怒られたときはとっても怖かったけど、あの美人さんをミニチュアにするとこんなにも愛らしく。

「店長、いや、アイリス店長抱きしめてもいいですか？、いや、抱き締めてもいいですか！！！！」

「・・・・・・なぜ、二回いったのじゃ？」

心底呆れた表情をする幼女が立っていらっしゃる。

「大切なことでしたので」
僕が、ビシッと答えると、店長は一歩後ず去った。
その後、逃げる店長を捕まえて、カウンターの店員用のイスに座ってから膝の上に店長を座らせる。
幼女店長はしんそこ疲れた表情をしていらっしゃいます。
膝の上に座ったまま、上目遣いでこちらを見上げると。
「ところで、ふうか、身長のびとらんか？」
と訊ねてきました、ああー、美人状態だと妖艶な感じだったけど、幼女だと可愛い舌足らずな女の子ですね、もって帰っていいですか？
「生態情報をかぶせたら伸びました」
その返答に、苦い表情を浮かべる店長、
「わしは、縮でしまったのじゃー」
と、可愛くのたまってくださる。
「いいじゃないですか、私達は魔法職だから小さくたって変わりませんよー」

と、頭をなぜなぜしてあげると、はうーと歳そうおうな表情を浮かべて弛緩なされた、襲っちゃいますよ店長？

そんな感じで、店長を抱いた状態でお店番、なかなか乙なものですなー。

カランカラン、鐘の音と扉の開く音。

『いらしゃいませー！』

ちゃんと仕事もしますよ、もちろんです。

さんわー　ネカマな僕と幼女になった店長さん（後書き）

さんわー

連続投稿じゃあません。

打って書いて投稿！

鉄は軟らかいうちに打てって奴です、違うか？

よんわー　ネカマな僕と初心者な女戦士さん（前書き）

打って書いて投稿。

よんわー　ネカマな僕と初心者な女戦士さん

『いらっしゃいませー！』

入ってきたのは、ふむ？見た目、十四歳くらいでしょうか？

赤毛の戦士職の格好をした女の子ですね。

「すみません、ここは何のお店なんでしょうか？」

ああ、初心者プレイヤーの方ですか。

「ここはですね、生産職であるアイリス店長のお店『ウイッチコンチェルト』、魔宝具を売っておりますですはい」

そう、優しく返事をすると。

「へ、生産職？ええ、じゃあ二人ともプレイヤーですか？ＮＰＣじゃなくて」

と、驚いた返事が返ってきたよ。

まあ、りっぱな店舗だしねー、学生プレイヤー御用達だし。

「そうじゃが？それがどうかしたのか」

と、お膝の上の店長さん。

「え、あれ？でもサービス開始は今日からだし、ええー？」

あれあれ、混乱していらっしゃる。
と、考えて、一つのことに思い当たる。
「あぁ、僕らは学生プレイヤー、うんとねβ版プレイヤーていえばわかるかな？」
僕の補足にやっと、意味が通じた表情を浮かべる戦士さん。
「ああ、なるほどβ版プレイヤーさんでしたか」
うんうん、観察してみればなかなか可愛い子だなー、と気づかれないない程度に彼女を観察する。
いまは、納得してやっと意識が商品に向いたのか、棚を物色しながら、青ざめたり白くなったりしていますね。
「店長」
「何じゃ？」
と、上目遣いの達人。
「初心者用の商品陳列しましたか？」
「あ」
といって、口をふさぐ店長、可愛いけど、もう遅いよ。
ふう、とため息をついて、店員しか空けられないお店用の巨大なア

イテムボックスを開いて物色を始める。

ふむ、力の指輪は戦士職なら必要かな？

後はー、守りの護符とレザー系装備一式位かな？

「店長、たいした儲けにならないですしこれあげちゃってもいいですか？」

「ふむ、まあいいじゃろう、こちらにも落ち度はあるしのー」

と、少ししゅんと落ち込んでいる店長の頭をなでてから、赤髪の戦士さんに話しかける。

「すみませーん」

「・・・・・・はい？」

こちらを振り向いた彼女の表情はグロッキー状態でした。

「本当に、すみません」

「ええ、なんのことですか？いや、わかってます、わかってますよ、私ごときに売れる商品なんて無いんですよね、いいんですよ、こんな敷居の高そうなお店に踏み込んでしまった私が悪いんです、それでは！」

と、一気にしゃべると逃げようとする戦士の少女。

だけど、扉は無常にも開くことは無かった。

店長が、万引き対策の扉ロックを使ったのだろう。
おかげで、唖然としていた僕もはっと意識を取り戻す。
「すみませんというのはですね、学生プレイヤー相手にずっと商売していたから、陳列品が学生プレイヤー用になっていたんですよ、これはお詫びです受け取ってください」
といって、レザー系一式と力の指輪と守りの護符を彼女の手に渡す。
思わず、受け取ってからわたわたする少女。
「え、え、でもお金はー」
「お詫びですから、いいですよ、僕らにとってはたいした額じゃないですしね」
特に、最初から生産職で通っている店長にとってはこれくらいはした金にすらならないだろう。
それだけ、生産職は需要の割に供給が不足がちに職なのだ。
「あ、ありがとうございます」
「いえいえ」
「あまり、気にしなくてもよいのじゃ、わらわも悪かったしのー」
てな感じで、ぺこぺこする戦士さんと、恐縮する魔法使いと、店長

さんの図が完成いたしました。

ふむ、せっかくだから、バイトが終わったら初心者プレイヤーさんのお手伝いでもしようかなー。

とか、何とか考えながら、カウンターの定位置に戻ると、傍にいた店長さんを抱きあげる。

「あ、あの」

と、まだいた戦士さんが話しかけてきました。

「お二人は、何レベルくらいなんですか？」

その質問に、

「ん？僕は５０だよ」

「ふむ？わらわは５０じゃな」

まあ、三年かけたしねー

まあ、三年かけたしのー

と二人同時に答えると、

絶句している戦士さんが目の前に立っていらっしゃいましたとさ。

よんわー　ネカマな僕と初心者な女戦士さん（後書き）

よんわー　です。

初心者から見たら５０レベルとはそれだけ高いのです。

サービス初日ですしね。

ごわー　ネカマな僕とやって来た魔法使いさん（前書き）

ごわーです。

そろそろ、限界かなー

ごわー　ネカマな僕とやって来た魔法使いさん

目の前には、なぜかぺこぺこする女戦士さん。

「ごめんさい、ごめんなさい」

えーと、なぜこのお人はこんなにも謝っているのでしょうか？

「えーと、どうしたんですか？」

はっきり言って、疑問です？

「すみません、すみません、そんな高レベルな方とは知らないで、私ったら失礼なことをしたような気がするし、アイテムと装備までいただいてしまったし」

切れ目なカッコイイといっても良い瞳を憂いに染めて、一生懸命ぺこぺこする戦士さん。

えーと、そこまでしていただく理由がわかりません。

「とりあえず頭をあげてください」

びっくりしたのか、フリーズしている店長さんをなでながら、彼女を落ち着かせようとがんばって見る。

正直、面倒だ。

と、思っていると。

カランカラン、と鐘を鳴らして、魔法使いの格好をした少女が入ってきた。

「おおー、こんなところにお店があったー・・・・・・って、みーちゃんこんなところでどうしたの？」

ぺこぺこする、戦士さんを凝視してから、急に叫び始める魔法使いさん。

どうやら、知り合いのようだ。

「へ？ふわーーーん、しーちゃん」

みーちゃんと、呼ばれた戦士の少女は振り向いて入ってきた魔法使いの少女を見てから、堰を切ったように泣きはじめると、そのまま抱きついた。

「お？おぉ？なんだ、どうしたんだ？」

おおー、本気でわたわたしているなー、とのんきに眺めていると。魔法使いの少女に、キッと睨まれました、あらら、良く見たらその切れ目な目とか戦士さんに良く似てらっしゃる。双子かしら？

「そこの二人！みーちゃんに何をしたんですか！」

「いや、特に何も」

してないよね？ねえ、してねいよね？

「う、ひぐ、ち、違うよ、しーちゃん」

「いいの、わかってるから、この二人がみーちゃんに何かひどいことをしたんだね、わかってる、わかってるから！」

してないよー？ねえ、きいてるー？

そして、胸の中で泣きじゃくる戦士さんの顔を優しく包んでから。

「だいじょうぶ、みーちゃんは私が守るから、だから笑って？」

か、かっこいい！僕もあんなことがいえるネカマになりたい、へ？げんじつは？って。

そんなこと聞くもんじゃありません。

ところでー

「ごほん、世界作っているところ悪いけど、いいかな二人とも」

営業スマイル、営業スマイル、膝の上の店長さんなんて、もー茫然自失を通り越して顔真っ赤にしてるからね、なんて物見せてくれるんですか、情操教育に悪いですよと。

「なに、何ですか？」

相変わらず、キッとこちらをにらみつけてくるみーちゃん魔法使いさん。

「えーと、戦士さんが泣いちゃったのって、僕らのせい？」

その言葉に、眉をひそめると。

「当たり前です、ほかに誰がしーちゃんを泣かせたっていうんですか！」

断言だね、断言ですね、わかります。

「ちがうよー、ちがうんだよー」

と、魔法使いさんの胸からか細い声が。

「なにが、違うのよ？」

おおー、そのまま怒鳴ったよー、びっくりしたよー。

「えと、あのね、定員さんと店長さんは良くしてくれたんだよー」

その言葉に、また眉を潜めるみーちゃんさん、そんなに眉をひそめると皺がよっちゃうよー。

「じゃあ、誰がしーちゃんを泣かせたというのよ」

と、完全に尋問ですねあれ。

「え、えと、あのね、あえていうなら、みーちゃんかな」

オドオドだよもう、第一印象は、するどい目つきのクールな戦士さんだったんだけどなー。

いまじゃ、もうただのへたれさんだよ。

「へ、なんでわたし？」

その返答は、心外だったらしく、本気で驚いているみーちゃんさん。

「だって、こんな人がたくさんいる所苦手なのに、みーちゃん、チュートリアル終わったあとさっさとどっかに行っちゃうんだもん」

と、これもう完全にしーちゃんさんへたれだね。

「え、え、わたしなの、私が悪かったの」

あー、こちらもテンパッております。

ねえ、この収拾ってどうやればいいのかな？

ごわー　ネカマな僕とやって来た魔法使いさん（後書き）

頭がひーとってっく

そろそろ、やめまひょか

ろくわー　ネカマな僕と気づきたくなかった現実（前書き）

ろくわー　です。

ろくわー　ネカマな僕と気づきたくなかった現実

「えと、えと、とりあえず、ごめんなさい」

「ごめんなさい」

と、頭を下げるみーちゃんな魔法使いさんと、しーちゃんな戦士さん。

ふむ、思い込みが激しいだけで根はいい子なのだろうか？

「いいよー、こっちも悪いところはあったしねー」

と、のんびりと返して見る、あれ、膝の上の店長さんいつの間にか寝てないか？

いやーほかほかしてる、何これカワイイ、キュんキュんするぜ。

店長さんのあどけない寝顔をつんつん、うっ、うなー、ですと。

と、寝ごとに悶えていると。双子らしき二人が何か差し出してきた。

「あ、あの、迷惑かけて、それでもこれなんてずうずうしいと思うんですけど」

「すみません、ごめんなさい、でも、それでも」

『フレンドになってください！』

おおう、とびくりと店長さんが目を覚ます、あ、ちょっと、もうち

ょっと、堪能していたかった。

「僕らが？いいのー、そんなに強くないけど」

「な、なんなおじゃ」

かんでるかんでる、店長さん、よしよーし、と頭をなでてやるとふにゃーって顔をするんだよなー。
前の美女状態も捨てがたいが、これはやっぱりイイ。

「いえいえ、初心者の私達から見たら５０レベルとか天と地の差ですから」

「と、いうか、普通に高レベルキャラですから二人とも」

まっね、実をいえばこの『ログセリオン』では、レベルをあげる方法はひとつではない、自由度の高いのゲームは、簡単にいえば息をしているだけでもレベルが上がるのだ。

つまり、モンスターを倒すだけでなく、何をしたか、どんな生き方をしたか、で経験値が常に入ってくるのである。

その代わり、やはりレベル上げはかなり困難になる。

学生プレイヤーにしても、５０台までいっている人は百人くらいしかいないだろうなーと思う。

それだけ、レベル上げが大変だが、そこは自由度の高いこの世界、そのうちあげるだろー、と達観していた上に、この世界でほぼ最強だろうプレイヤーのお方とずっと行動を共にしていたら、５０まで

いつの間にか上がっていたのが真実の所なのだが。

ちなみに、そんなわけで店長の生産職でありながらレベル５０はかなりすごい領域だったりするのだが。

「まあ、いいよー、二人ともいい子みたいだし、なれてきたら僕の戦闘職系の友達でも紹介するよ」

と、ノンビーリ答えて見る。

「ほんとですか！？」

「いいんですか！？」

やっぱり双子かな、この二人、驚いた時の顔そっくりだー。

と、何とか考えながら二人の差し出していた、ステータスカードのフレンド欄に自分の名前を書きこんでいく。

ほらー店長も書きなよー。

「ふん、しょうがないのじゃ」

と、すっごーい笑顔で書き込んでいく店長、二人分書き込んでっと。

「はい、かんせーい」

「したのじゃ」

これで、二人のフレンド欄には僕らの名前が刻まれたはずだ。

そして、こちらが書き込むと、こちらのフレンド欄にも、しーちゃん、みーちゃん、と名前が。

て、お二人とも愛称じゃなくキャラ名ですかーーー！

本当に、しーちゃん戦士とみーちゃん魔法使いなお二人でした。

「えーと、アイリスさんと、ふうかさん・・・」

「どうしたの？みーちゃん」

僕らの名前を読んで、固まるみーちゃんさんに心配そうなしーちゃんさん。

「って、ふうかーーーーーー！？？・？」

本日、二度目のテンパリ発動！

「は、はい？」

思わず返事してしまったぜ、びっくりした・・・。

「あ、あの、本当の、魔法使いで、名前がふうか、なんですか？」

切れ切れだね？確かに僕はふかかだが。

「うん、そうだけど」

なぜなぜ？そこまでびっくりなさる。

「じゃ、じゃあ、あのＣＭのふうかさんなんですか？氷の魔女の？」

そこまでいわれて僕も思い当たった。

『ログセリオン』のＣＭで、戦闘職や生産職などの紹介の部分で、高レベルプレイヤーのキャラを使用したのだ。

そして、魔法職のひとつ「氷の魔道士」＞アイスラグナー＜の紹介で確かに自分のキャラが使われて記憶がある。

そして、この国ほとんどの人間は少なからず『ログセリオン』のＣＭは一回は見ているだろう、特にプレイしている人間のほとんどは。

とりあえず、取り合えずだ、この世界で僕は結構有名人らしいということに今更気が付いた僕だった。

ろくわー　ネカマな僕と気づきたくなかった現実（後書き）

意外と、有名人かもしれない主人公です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5202z/

ネカマな僕とかっこよすぎる彼氏な彼女

2011年12月18日11時54分発行